

---

# つめたい手

三条司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

つめたい手

### 【Nコード】

N9648T

### 【作者名】

三条司

### 【あらすじ】

短編企画 『しずくとつむぐ』 用に書いた短編です。

高校二年生のある梅雨の日。放課後、図書室の日本文学の棚前に呼び出された僕。

梅雨らしくない雨雲が運んだ出会いとは……。

## （前書き）

お久しぶりです。

このたび、t w i t t e rで懇意にさせていただいている、そうじ  
たかひろさんが企画された『しずくとつむぐ』に参加させていた  
だきました。

同じシチュエーションで、描写の違いを楽しむ、というものです。

ここに辿り着いていただいのも、何かの縁。他の参加者さんの作品  
も、ぜひ一読されてはいかがでしょう？

楽しんでいただければ、これ幸い。

雨が、降っている。

窓際の席から見える校舎の外は、どんよりとした曇り空に縁取られていて、マテリアルが違っただけで似たような灰色をした校舎と空に囲まれた僕たち生徒は、まるでジオラマキットの一部みたいだな、なんて思う。

校庭の隅にある木々だけが妙に浮いた色をなして、なんだか笑えてくる。現実味に欠けるといっか。そもそも、これが現実だなんて、誰が決めたんだろう？

教壇に立っているのが教師だなんて決めたのは誰だ？ 前列で笑っているのは、本当に女生徒なのか？ あれが「女性」だなんて、誰が決めたんだ？ 隣で巫山戯合っているのが友達同士だと、どうして分かる？

学校公認のカウンセラーを勧められそうな思考に気付いて、僕はため息をつく。あごを支えてた右手を左手に替えて、もう一度、視線を窓の外の曇り空に向けた。

ああ、疲れているんだな。

雨だし。梅雨だし。空気が重たいし。

そもそも、夏は好きじゃないんだ。梅雨というのは、これから夏になりますよという、ありがた迷惑丸出しの、季節の恩着せがましさを、じつとりと湿気で汗ばむ半袖のシャツに感じてまったく嫌になる。いいのに。そんなの。空気読まなくても、いいのに。四季なんて、律儀に毎年守ってくれなかったって、誰も本当はそんなに困らないのに。

ほら。やっぱり疲れてる。

頭の中に手をつっ込んで、ぐちゃぐちゃにしていまいたい。ため息のかわりに、ゆっくりと息を吐いた。それから目を上げて、教師の後ろにある黒板の上にフォーカスを当てる。

ああ、もうこんな時間か。

緩慢な動きで教師が開いていた資料を片付け始めるや否や、教室中が騒然となる。家にいたらいたで、どこか違うところに行きたいとつずつしているくせに、家ではないところ、つまり学校に来ると、また学校を出るのが待ち遠しくなる。どこに行っても一緒だつて、一体いつになったらこのひとたちは気付くんだろう。

横目で、毎日毎日飽きもせずに放課後を讃え祀るクラスメイトを捉える。焦点を目の前だけにあてれば、そんなわずらわしいものもすぐに消えてくれる。

行かなくちゃいけないところがあるんだ。

片手に通学鞆を、もう片方の手を制服のポケットに突っ込む。ざらりとした感触。学校で配布されるみたいな、リサイクルされた紙。微かな凹凸も、指の腹には感じ取られるらしい。

差出人の名前もなく、書かれた文字にも見覚えはなく。普通なら、気味悪がっていただろうに。酔狂だな。そうも思っけれど、心のあるままに足を踏み出してみるのも、面白いかもしれない。

いつのまにか通学鞆に突っ込まれていたその封筒に気付いたのは、昼休みも過ぎた頃だった。一体、いつ入れられたのか、誰が入れたのか、どこで入れられたのか、まったく定かではない。ただ、そこに書かれていたシンプルな言葉に、なんとなく心惹かれた。

## 『図書室

### 日本文学の棚

待っています』

暗号みたいな言葉の羅列。秘密の言語みたいだけれど、秘密を共有するには、それを理解するには、僕はこの差出人のことを知らない。

うちの図書室は、室と呼ぶには大きくて、館と呼ぶには小さい大きさだ。天井全体に窓が嵌め込まれているので、こんな梅雨どきだつていうのに、まだまだ光が差し込んで明るい。これで蛍光灯じゃなかったら、もっとここにいたいと思うのに。校舎自体は割と古めかしい造りのくせに、ここだけはモダンな装いをしているのは、ここが増築された新しい建物だからに他ならない。折角の建築物だというのに、ここはメインの校舎からは少し離れていて、そのせいであまり生徒が寄りつかないのだとか。

鈍く銀色に光るゲートを押しのけて図書室に入ったら、ゆっくりとした歩調で目当ての場所へ向かう。まっすぐ日本文学の棚に向かうべきだろうか？ それとも、どこかで少し時間をつぶしてから？ そもそも、あの短い手紙には、時刻の指定がされていなかった。それはどうして？ まさか、朝からずっとあそこで待っているとか？ いやいや。そんなわけは。

いやでも、本当に長時間待っているんだとしたら、少し気の毒かな。

いや、待て。そもそも、本当に誰か待っているとでも？

でも、この時世に誰があんな古風すぎる悪戯を仕掛けるというんだ？

じゃあ、何故、差出人の名が書かれていない？

だから、それは……。

頭の中で、僕が分裂する。分裂した僕は、小さな僕たちになって、喧々囂々と議論を始める。どの意見も一理あるし、どの意見も下らないと一笑にふせられる類のもの。

そもそも、ここに来た時点で、誰かが待っているという可能性を期待しているわけじゃないか。だったら、誰がいるのか、誰かいるのか、確かめてみるだけ、いいじゃないか。

ああ、それは一理ある。

そうだな。確かめて、誰もいなければ、本でも借りて帰ればいいだけだしなあ。

理屈が干渉できない、好奇心エリア担当の小さな僕の意見を聞いた途端、他の僕たちはうんうんとしきりに頷き始める。

満場一致ってわけか。つくづく、僕という人間は単純にできている。微笑んでやりたい。この愚かなまでに単純な、僕の脳細胞たちを。もしかしたら、本当に微笑んでいたのかもしれない。こんなに穏やかで平和な気持ちになるのは、久しぶりだ。珍しい。これだけでも、あの手紙に価値があるってもんだ。

日本文学の棚は、図書室の一番奥。人気がないわけでもないだろうに、何故か人目につかない、誰にも気付かれないようなところに置かれているこの不憫な棚は、それでもたくさんの文豪たちをその腕に抱えてどこか誇らしげだ。

わざわざここを指定してくるということは、この差出人は図書室の間取りに詳しいということか。

渋い警視、もしくはハードボイルド気取りの探偵のような口調で、僕が僕に囁く。

だからなんだっていうんだ。

往年のハリウッドスターみたいな爽やかに不良な笑顔で、もうひとりの僕が応じる。

ちようど、森鷗外と書かれた背表紙を視界に入れたときだった。今まで明るかったはずの図書室の蛍光灯が一斉に消えた。

停電か？ と訝しむ暇もなく、今度はごろごろと不穏な音が頭上から鳴り響く。遠くの空に光ってみえたのは、これか。梅雨というよりも、雨期みたいだな。そんな感想を抱いていると、いよいよ本格的に降り始めた。

灰色なんて生易しいものじゃない。塗りたくられたタールみたいな色をした空は、不気味に立体的な雲に援護されて、CGの見本みたいだ。狂った扇風機を彷彿とさせる風が、そこら中に吹き荒れる。大粒の雨が、これでもかと天窓を叩く。どんなに叩いたって、こっちは入ってこられないのに。子供の頑固さをもってして、雨粒は

必死の形相でこちら側への侵入を試みる。窓にたたき付けられる雫の音、空から降り注ぐ雲の不機嫌な唸り声、暴れ回る癩癩持ちの風の駄々。おかげで、森鷗外 of 字もよく見えなくなってしまった。さぞかし、森先生はご立腹だろう。

誰かが来るという保証もないのに、ここに僕がいると、その誰かが知っている保証もないのに。でも、なんだか、離れがたい。もう少し、ここにいてもいいか。

古びた背中を見せる森鷗外の本でも手に取ってみようかと、腕を伸ばした。

確か、このあたりに。

感覚だけを頼りに腕を伸ばし、手を伸ばし、指先に神経を集中させる。

固い布の粗い表面を想像していたのに、僕の指はまったく違ったものを触った。

いや。違う。触られた。

人差し指と中指、それに薬指の上に、何かが乗っている。爪から第二関節までを支配するその感触は、たぶん、指。それも、とても冷たい。

氷を触ったのではない。あんなに、センサーシヨナルじゃない。冷凍庫に手をつ込んだときとも違う。あんなに、冷気は感じない。プールの水に足を入れたときとも、違う。あんなに、心萎える期待と裏切りじゃない。

大して力は感じないのに、重くはないのに、その存在感だけはひしひしと感じる。自分ではない指に刻まれた指紋の皺ひとつひとつを、爪が数えられるような。指だけは、この世界のどこにいるよりも安全なような。皮膚から伝わる刺激が、身体全体を強張らせるような。

「誰？」

あえて、そちらには顔を向けず、囁いた。

「お待ちしておりました」



空気を、最小限だけ震わせるような発声で、囁き返された。

「手紙は、君が？」

「はい」

「そう」

「私が誰か、お尋ねにならないのですか？」

「聞いて欲しいの？」

「いいえ。聞かれても、答えられる類ではありません」

「そう」

「何故、ここへ？」

「君が呼んだからでは？」

ふ、と鼻息が洩れた。可笑しい。幸せだ。

「……愚問でした」

「いや。可笑しいよ。とても、楽しい。ありがとう」

「時間が、あまりありません」

重ねられた指が、少しだけ震えた。葉っぱの上に乗っかって、雨粒が河に落つこちただけで、葉っぱごと大きく身体を揺らす、世界最小のトカゲを思い出した。

「お慕い申し上げておりました」

「……そう」

唸り声を上げていた風と共に、雨雲が足早に去っていく。蛍光灯もいつもの定位置に戻ろうと、ちかちかと点滅を繰り返す。あれだけ暗くなっていた室内は、いつの間にか、明るい日常の顔を取り戻していた。

そして、それと引き替えに、あの指が消えた。

顔を傾げて本棚に目をやったけれど、そこには森鷗外がすまし顔で鎮座するだけ。

誰だったのか、聞けば良かったのかな。

そんなことを思ったけれど、もうあとの祭り。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9648t/>

---

つめたい手

2011年6月16日12時51分発行